

宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび 体験プログラム参加者の意識と価値観

松 原 小夜子*

Participant's Consciousness and Values of Events and Experience Programs
related to way of living in Guest Houses

Sayoko MATSUBARA

1. はじめに

本稿は、日本における宿泊型ゲストハウスの特質を把握しようとする研究の第6報である。本稿を含む一連の研究では、ゲストハウスを、旅館業法上、簡易宿所に分類される宿で、①素泊まりを基本とする、②ドミトリイと呼ばれる相部屋がある、③台所や居間など何らかの共用空間がある、この3つに該当する宿と定義している。

既報でも述べてきたように、近年、観光学、地理学、心理学、都市計画学、建築学など様々な分野で研究成果が蓄積されつつあり、これらの研究から、ゲストハウスは、安価な宿というにとどまらず、宿泊者や地域の人など、宿に関わる人々の交流を生み、地域を活性化する可能性もあるなど、多面的な特徴を有する存在であることがわかる（既往研究については、松原（2019）を参照されたい）。

同時に、ゲストハウスは、必ずしも宿泊を伴わない各種のイベントや体験プログラム（以下では「イベント等」と表記する）が企画、実施されている場であることも見逃せない。ここでいう「イベント」とは、宿が企画する行事のうち、宿泊者などの交流、各種の学びなど、体験を伴わないものを指し、「体験プログラム」とは、同じく、衣食住の暮らし方やモノづくり、農作業、アウトドア関連など、実際の体験を伴うものを指している。こういった視点から、松原（2018）では、全国のゲストハウスにおけるイベント等の実施状況をとらえ、イベント等は半数強の宿で実施されており、イベントの種類では、「交流・親睦」と「季節の行事」が最も多いこと、体験プログラムの種類では、「暮らし方・モノづくり」が最も多く、日本の伝統的な生活文化、自然環境、農業や漁業、地域の魅力などの再発見につながるような多彩なプログラムが実施されていることがわかった。

さらに、松原（2019）では、暮らし方に関連するイベント等に着目して、それらを、「衣生活」「食生活」「住生活」「モノ作り」「生産・収穫」「暮らし総合」の6つに分類して具

* 生活科学部 生活環境デザイン学科

体的内容をとらえた。「モノ作り」「生産・収穫」を含めたのは、伝統的な自給自足の生活では、生産と消費とがわかちがたく存在していたと考えたためである。その結果、いずれの分類においても、暮らし方に関する多彩なプログラムが実施されており、それらのプログラムは、①着物や浴衣の着付け、味噌仕込みや餅つき、壁塗りといった日本の伝統的な暮らし方、②地域の伝統産業や伝統工芸、郷土料理といった地域の特性を生かした暮らし方、③自然素材、自然食、有機農業、自給自足といった自然と共生する循環型の暮らし方の3つを特徴としていることがわかった。

これらの結果を踏まえ、本稿では、暮らし方に関するイベント等の事例を取りあげ、それらが、参加者の意識や価値観にどのような影響を与えているのかをとらえることによって、「暮らし方」からみたゲストハウスの特質を考察することをねらいとしたい。

2. 方法

〈生産・収穫〉体験に該当する事例として、愛知県南知多町に立地するゲストハウスHで行われた「自然農田んぼ2016」、〈暮らし総合〉イベントに該当する事例として、同じくゲストハウスHで行われた「世界130か国自転車旅」お話し会、同じく、名古屋市の有松地区に立地するゲストハウスMで行われた「MADOマルシェ」、この他に、〈地域関連〉イベントに該当する事例として、岐阜県高山市に立地するゲストハウスTで行われた「ひだマンデー」の4つを対象とした。

調査の方法は、これらのイベント等に参加して、その進行状況や参加者の行動をとらえる参与観察調査と、参加者へのアンケート調査である(表1)。アンケート調査の主な項目は、回答者の属性、イベント等への参加理由と評価、イベント等参加による価値観の変化、日ごろから関心のある暮らし方や生き方などである。

「自然農田んぼ2016」は、自然農による米作りの体験プログラムである。このプログラムは、自然農を実践している川口由一氏の指導を受けて「耕さず、肥料・農薬を用いず、草や虫を敵とせず、生命に寄り添う」方法で行われたものである。種おろしから収穫まで、様々なプロセスが体験できるが、今回の調査では、①種おろし(2016年4月19日)―自然農指導者および宿オーナーの指示のもと、最初の作業である「種おろし」を実施、②田植え(2016年6月26日)―宿オーナーの先導のもと、手作業による田植えを実施、③稲

表1 イベント等調査実施一覧

イベント等種類	イベント等内容	実施GH	実施日	参加者数	回答者数
生産・収穫	自然農種おろし	H	2016.4.19	18	7
	自然農田植え	H	2016.6.26	20	10
	自然農稲刈り	H	2016.10.30	16	6
	自然農脱穀	H	2016.11.13	12	8
暮らし総合	世界130か国自転車旅	H	2016.7.5	9	8
	MADOマルシェ vol.3	M	2016.9.10		20
	MADOマルシェ vol.4	M	2016.11.12		17
地域関連	ひだマンデー 食事会	T	2016.10.3	19	42

宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび体験プログラム参加者の意識と価値観

刈り（2016年10月30日）一宿オーナーが手作業による方法を参加者に伝え、それを参加者から参加者へと伝えるなどして実施、④脱穀（2016年11月13日）—大型機械は使用せず、足ふみ脱穀機と唐箕などを使い、ほとんど手作業により実施、この4つを対象とした。なお、「自然農田んぼ2016」の総まとめとして、2016年12月3日に、ゲストハウスHにおいて、収穫を祝い参加者の交流を促す「収穫祭」も行われたことを付記しておきたい。アンケート調査では、計31人から回答を得た。

「世界130か国自転車旅」は、日本国内をはじめ、世界各国を自転車で旅している松本英揮氏を講師に招いて、2016年7月5日に行われたお話し会で、中国の南京の旅、ヨーロッパ各国のエコな暮らしなどについての説明があった。お話し会終了後には懇親会も行われた。開催が平日の夜だったこともあり、参加者は9人と少なく、8人から回答を得た。

「MADOマルシェ」は、ゲストハウスMで定期的にかかれる小さな市場であり、毎回、自然にこだわった生産者の品が出展されている。今回は、2016年9月10日と11月12日のマルシェで調査を実施し、37人から回答を得た。

主な出展者は以下のとおりである。

「つむぎて」自然循環栽培農法で作物を作るなどの活動をしている合同会社。

「政七屋」1828年創業のはんぺん店。新鮮な青魚をさばき石臼で練り上げた特製すり身を手作りで蒸しあげている。

「内藤養鶏」魚介類の餌を与えない臭みのない卵を特徴としている。

「ann de ally」植物油を主原料とし、昔ながらのコールドプロセス製法で作った石鹸を販売。

「IST」伝統工芸である有松絞りを新しいカタチで発展させることを目的に結成された若手作家たちによる集団。有松技法で染色した折り紙、ぼち袋などの販売とともに、ワークショップも開催。

「RIRION」布を使った赤ちゃんに優しいベビー用クラフトを販売。

「町家カフェ MADO」無肥料・無農薬野菜を使ったスープ、新鮮卵を使用したカステラ、天然酵母の自家製パンなどを販売。

「ひだマンデー」は、ゲストハウスTにおいて概ね毎月1回開催されている交流食事会であり、宿泊者、地域の人、オーナー家族などが、一品持ち寄りあるいはBBQなどで食事をしながら地域への理解を深め交流することをねらいとしている。今回は、2016年10月3日に行われた交流会で調査を行うとともに、オーナーの協力を得て、これまでの「ひだマンデー」参加者に声をかけてもらう方式も加えて、計42人から回答を得た。

3. 結果と考察

3.1 自然農田んぼ2016

回答者31人の属性について、性別では、男性17人（54.8%）、女性14人（45.2%）、年代では、20代11人（35.5%）、30代8人（25.8%）、40代10人（32.3%）など、20代から40代が主で、職業では、社会人19人（63.3%）が最も多く、居住地では、愛知県が23人（74.2%）を占める結果であった。

まず、自然農の体験プログラムへの参加理由を複数回答で尋ねたところ、図1のような

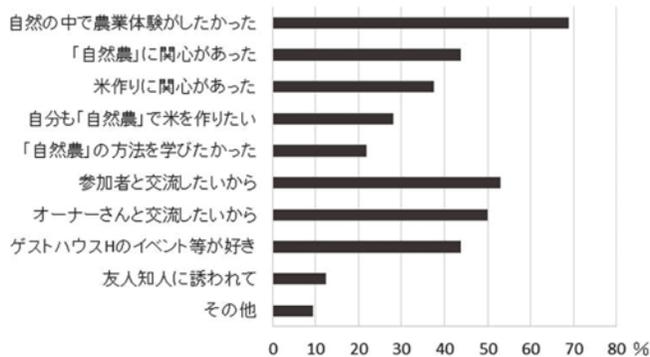


図1 「自然農田んぼ2016」への参加理由

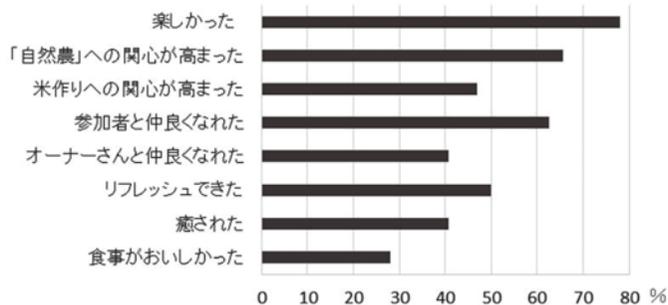


図2 「自然農田んぼ2016」に参加してよかったこと

結果となった。「自然の中で農業体験したかった」(68.8%)、「米作りに関心があった」(37.5%)など農業への関心や、「自然農に関心があった」(43.8%)、「自然農の方法を学びたかった」(21.9%)、「自分も自然農で米を作りたい」(28.1%)など自然農への関心が高いことがわかる。これに加えて、「参加者と交流したいから」(53.1%)、「オーナーさんと交流したいから」(50.0%)といった交流面も参加の理由となっていることが特徴である。

今回のプログラムに参加してよかったかどうかを尋ねたところ、「よかった」が90.6%、「まあよかった」が9.4%と満足度は大変高かった。その理由を「よかった点」への複数回答からとらえてみると、図2に示すように、まずは「楽しかった」が最も多く78.1%であることに加え、「自然農への関心が高まった」(65.6%)、「米づくりへの関心が高まった」(46.9%)なども多く、参加後に米作りや自然農などへの関心が高まり、また、「参加者と仲良くなれた」(62.5%)、「オーナーさんと仲良くなれた」(40.6%)など、交流希望も満たされていることなどから、満足感を得ている様子が見えてきた。

観察調査からも参加者の交流の様子をとらえることができた。最初のプログラムである「種おろし」では、まずは自己紹介などからはじまり、作業をしながら会話がすすみ、これまでの人生についてあるいは最近の悩みなども話題に上るようになった。その後の「田植え」「稲刈り」「脱穀」でも、初めての人は自己紹介して会話に加わり、複数回参加して

いる人は、一層会話がすすむなどして交流が深まり、人と人とのつながりが生まれている様子であった。GHの特徴の一つが「交流面」にあることは既報において述べてきたが、イベント等を通して交流が促されていることがわかった。

次に、今回のプログラムに参加してみて、暮らし方等の価値観に何らかの変化があったかどうかを尋ねたところ、「思う」が43.8%、「まあ思う」が37.5%というように、何らかの変化があった人が8割を占めることがわかった。価値観変化の内容を自由記述で記載してもらったところ、「食（米、野菜）を丁寧に（大切に、ありがたく）いただくようになった」が4人あり、「農家の人の（あるいは米作りの）大変さがわかった」も2人あるなど、感謝の気持ちが増している様子うかがえた。一方、「農業の楽しさが分かった」（2人）、「自分でお米を育てる生活をしたい」「大規模でなければ手動の農機具で作業ができることを学び、むやみな自動化は不要と考えを改めた」など、農業の楽しさや、手作業による米作りを肯定するような価値観変化もあった。その他、「自然の素晴らしさをみつまなおせた」「身の回りの自然に感謝の気持ちを強く感じられるようになった」など、自然への見直しや感謝についての意見や、「生きることの豊かさを感じた」といった意見もあった。

さらに、日ごろから関心のある暮らし方や生き方について複数回答で尋ねたところ、図3のような結果となった。今回のプログラムの性質上、「自然農」（59.4%）への関心が高いことはもちろんとして、「モノの豊かさより心の豊かさ」（59.4%）、「スローライフ」（50.0%）などへの指向や、「地域おこし」（65.6%）、「地産地消」（59.4%）、「地域自給」（46.9%）、「ローカリズム」（40.6%）といった地域重視、地域振興への指向も高いことがわかった。

これら10項目のうち何項目に関心があるかを基準として、Ⅰ（6項目以上）、Ⅱ（5～4項目）、Ⅲ（3～2項目）、Ⅳ（1～0項目）の4段階に分けたものを「暮らし方等への関心度」として設定したところ、Ⅰ段階が最も多く13人であった。この関心度別に価値観の変化の有無をみると、図4に示すように、これらの暮らし方に日頃から関心の高いⅠ段階では、価値観変化があった人が多く、「思う」が61.5%あり、「まあ思う」の23.1%を合わせると84.6%に上る。Ⅱ～Ⅳ段階では、「思う」は3割～4割に減るものの、「まあ思う」を合わせると7割弱～9割強に何らかの変化があったことがわかり、今回のプログラムへの参加が価値観の変化を促している様子うかがえた。

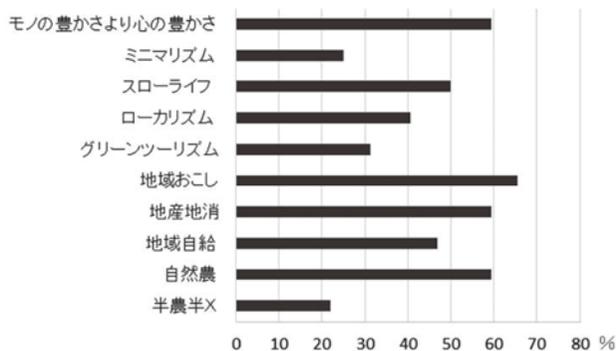


図3 日ごろから関心のある暮らし方や生き方（自然農）

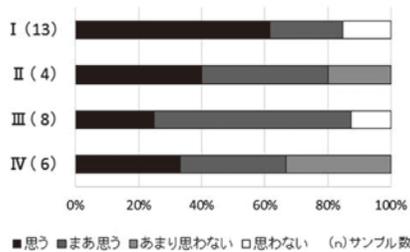


図4 暮らし方等関心度別の価値観変化 (自然農)

3.2 世界130か国自転車旅

回答者8人の性別では、男性6人、女性2人、年代では、20代、30代、50代、60代が2人ずつと幅広く、職業等では社会人が7人、居住地は愛知県内が7人であった。

まず、自転車旅のお話会への参加理由を複数回答で尋ねたところ、図5のような結果となった。「世界の旅に関心がある」(50.0%)、「自分も世界を旅したい」(25.0%)、「自転車の旅に関心がある」(50.0%)など、世界旅や自転車旅に関心を持つ人が参加していることがわかる。これに加えて、「松本さんと交流したい」(37.5%)、「松本さんの生き方に関心がある」(25.0%)など、講師である松本氏への関心も参加理由であった。

今回のプログラムに参加してよかったかどうかを尋ねたところ、8人全員が「よかった」との回答であり、満足度は非常に高かった。その理由を複数回答からとらえた結果では、図6に示すように、まずは「楽しかった」と「エコへの関心が高まった」が87.5%と大変多く、加えて、「自転車旅への関心が高まった」(62.5%)、「世界旅の関心が高まった」(37.5%)など、世界旅や自転車旅について知ることができたことや、また、「松本さんと交流できた」(37.5%)、「松本さんの生き方に触れることができた」(37.5%)など、講師の松本氏と交流できたことも満足感を生んでいる様子であった。今回は参加者が少人数だったこともあって、話の途中で質問が出るなど和気あいあいの雰囲気で行ったことや、お話会後の懇親会でも交流できたことも満足感につながっていると考えられる。

次に、今回のプログラムに参加してみて、暮らし方等の価値観に何らかの変化があったかどうかを尋ねたところ、8人全員が「思う」と回答した。価値観変化に関する自由記述では、「エコなまちづくり、暮らしを選択することの意義を感じた」「ビニール袋を使わないとか少しでも車に乗る時間を減らしていけたらと思う」「エコなことしようと思った」などエコへの関心の高まりがうかがえた。「街づくりへの関心が高まった」との回答もあった。

日ごろから関心のある暮らし方や生き方については、図7のような結果となった。「地産地消」(62.5%)、「地域おこし」(37.5%)、「グリーンツーリズム」(37.5%)など、地域重視、地域振興への関心や、「モノの豊かさより心の豊かさより心の豊かさ」(50.0%)、「スローライフ」(37.5%)への関心があることがわかった。

また、先に述べた「暮らし方等への関心度」をとらえたところ、I段階が1人、II段階が2人、III段階が3人、IV段階が2人であったので、「暮らし方等への関心度」の低い人も含め、全員に価値観の変化があったことがわかる。

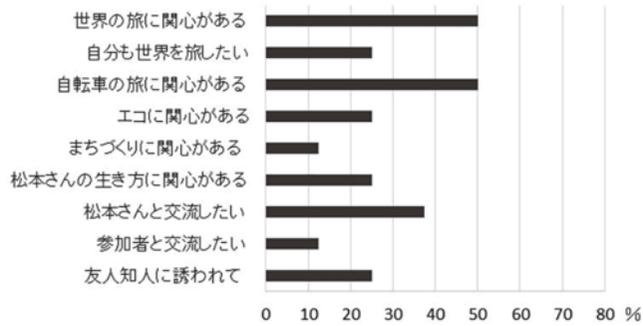


図5 「世界130か国自転車旅」への参加理由

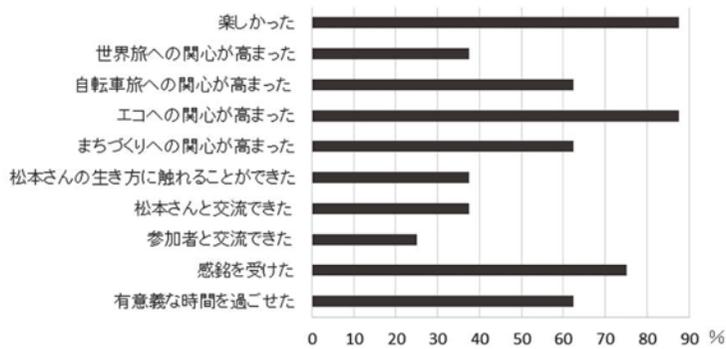


図6 「世界130か国自転車旅」に参加してよかったこと

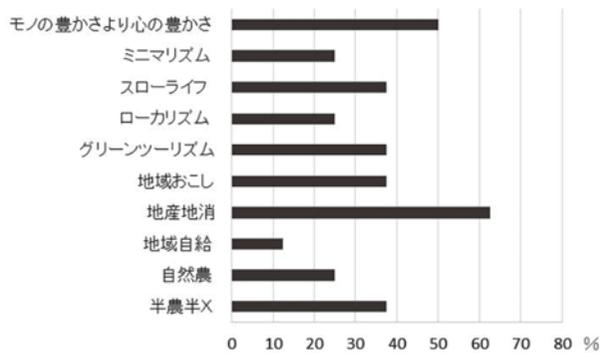


図7 日ごろから関心のある暮らし方や生き方（自転車旅）

3.3 MADO マルシェ

回答者37人の性別では、女性31人(83.8%)、男性6人(16.2%)と女性が多く、年代では、20代14人(38.9%)、30代6人(16.7%)、40代10人(27.8%)、50代以上6人(16.7%)と幅広く、職業等では、学生14人(41.2%)、社会人9人(26.5%)、専業主婦10人(29.4%)などで、居住地は、愛知県30人(88.2%)であった。

まず、「MADOマルシェ」への参加理由を複数回答で尋ねた結果が図8である。「友人知人に誘われて」が38.7%、「出展者に誘われて」が9.7%など、主体的参加というよりは誘われての参加が多いことが特徴である。また、有松地区を観光などで訪れていた人がたまたまマルシェに出会い、立ち寄って出展を見たり食事をしたりというケースが多いことも観察調査からうかがえたが、それを反映してか、出展内容への関心や交流希望などは少ない結果であった。

今回のプログラムに参加してよかったかどうかでは、「よかった」が74.3%、「まあよかった」が22.9%であり、たまたま立ち寄った人や誘われて参加した人たちが結果として満足しており、理由としては、図9に示すように、主に「楽しかった」(57.6%)、「ランチや飲み物がおいしかった」(51.5%)であるなど、自然を生かした様々な出展や、自然栽培の食材を使った食事を評価している様子がうかがえる。なお、ワークショップも行われた有松絞りについては、「有松絞りへの関心が高まった」との回答が30.3%あった。出展者や参加者、宿のオーナーとの交流ができたとの回答も、あわせると48%であった。

次に、今回のプログラムに参加してみて、暮らし方等の価値観に何らかの変化があったかどうかを尋ねたところ、「思う」が15.2%、「まあ思う」が42.4%、「あまり思わない」が39.4%であり、他のイベント等と比べると「思う」が少なく、「あまり思わない」が多い結果であるが、出展を見たり食事をしたりという今回のマルシェの性質から考えると、「思う」「まあ思う」をあわせた何らかの価値観変化があった人が57.6%にのぼることは注目に値するといえるのではないだろうか。価値観変化に関する自由記述も少なかったが、「自然農に取り組みたい」「元々関心があったが、今の生活の中でなかなか実行出来ておらず、こういったイベントを見る中で自分の意識を再確認している」との記述があった。

日ごろから関心のある暮らし方や生き方については、図10のように、「地域おこし」が最も多く44.1%あり、「地産地消」(23.5%)、「ローカリズム」(14.7%)、「地域自給」(8.8%)など、地域重視、地域振興への関心を持つ人が相対的に多いことがわかる。

また、先に述べた「暮らし方等への関心度」では、Ⅰ段階はなく、Ⅱ段階が3人、Ⅲ段階が11人、Ⅳ段階が23人となり、これらの暮らしに関心の低い人が多いことがわかった。しかし、図11に示すように、Ⅲ段階やⅣ段階の人の半数程度は、変化があったと「思う」「まあ思う」と回答していることから、今回のマルシェへの参加が何らかの形で価値観の変化を促している様子がうかがえる。

3.4 ひだマンデー

10月3日の食事会の様子であるが、参加者は23人(男性9人、女性14人)で、内訳は、宿泊者6人、地域の人10人、イベント参加者2人、オーナー家族3人、スタッフ2人であった。BBQ準備の後、自己紹介からはじまり、5~6人くらいの単位で食事しながら交流が進んでいった。地域からは、遠方からの移住者が多く、友人づくりや互いの情報交換といっ

宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび体験プログラム参加者の意識と価値観

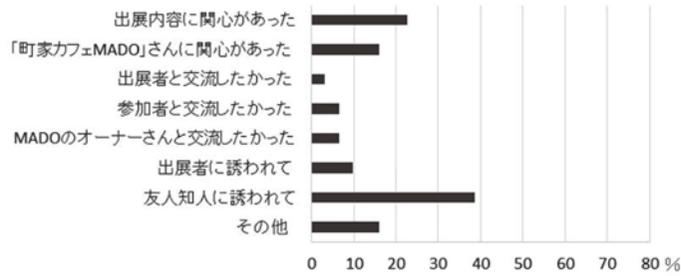


図8 「MADO マルシェ」への参加理由

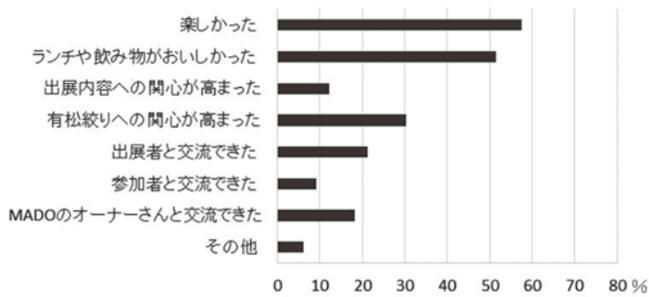


図9 「MADO マルシェ」に参加してよかったこと

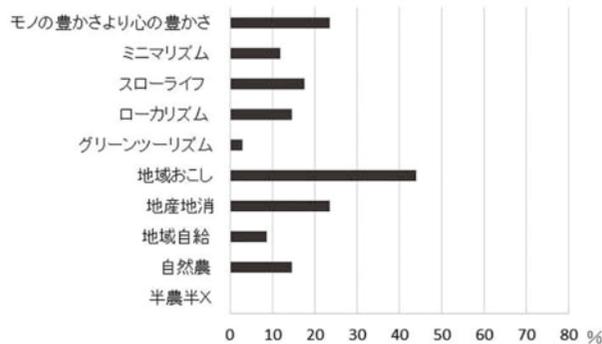


図10 日ごろから関心のある暮らし方や生き方（マルシェ）

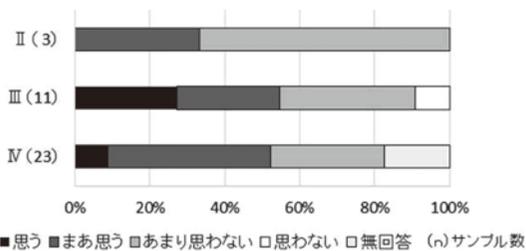


図11 暮らし方等関心度別の価値観変化（マルシェ）

た交流を求めて参加している様子であった。これまでの「ひだマンデー」で知り合ったりピーターの人同士の交流もあった。

アンケート調査の回答者42人については、性別では、男性23人（54.8%）、女性19人（45.2%）、年代では、20代17人（42.5%）、30代19人（47.5%）と若い世代が多く、職業等では、社会人が36人（90%）を占め、居住地は、岐阜県が24人（60%）の他、埼玉県、三重県、兵庫県が各2人（各5%）、10都府県から各1人（各2.5%）であった。

「ひだマンデー」への参加理由を複数回答で尋ねたところ、図12に示すように、「参加者と交流したかった」（59.5%）、「オーナーさんと交流したかった」（42.9%）など、交流面を求めて参加している人が多く、また、「友人知人に誘われて」（52.4%）、「オーナーさんに誘われて」（28.6%）など、人と人との交流やつながりが主な参加理由となっており、まさに交流食事会であることがわかる。加えて、「地域の観光や暮らし等の情報を得たかった」（40.5%）、「地域おこしに役立つ情報を得たかった」（9.5%）など、地域情報の取得や交換も参加理由となっていることがわかる。

「ひだマンデー」に参加してよかったかどうかを尋ねたところ、「よかった」が85.7%、「まあよかった」が11.9%と満足度は大変高かった。その理由を「よかった点」への複数回答からとらえてみると、図13に示すように、まずは全員が「楽しかった」と回答しており、「食べ物や飲み物がおもしろかった」も54.8%あって、食事会として成功している様子がうかがえる。そして、参加理由として多かった交流面についても、「参加者と交流できた」が92.9%、「オーナーさんと交流できた」が71.4%に上るなど、期待に応える内容であったことがわかる。地域情報の取得についても「地域の観光や暮らし等の情報が得られた」が50%あった。

「ひだマンデー」に参加してみて、暮らし方等の価値観に何らかの変化があったかどうかを尋ねたところ、「思う」が40.5%、「まあ思う」が31.0%と、何らかの変化があった人が7割であることがわかった。価値観変化の内容を自由記述で記載してもらったところ、多数の記載があった。内容は、多様な価値観との出会い、生き方や暮らし方についての考え方の変化、人とのつながりや地域の人とのつながりの大切さへの気づき、高山や飛騨地

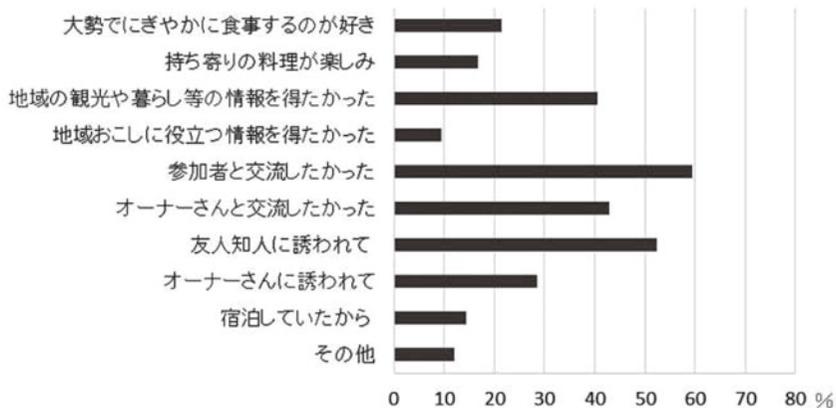


図12 「ひだマンデー」への参加理由

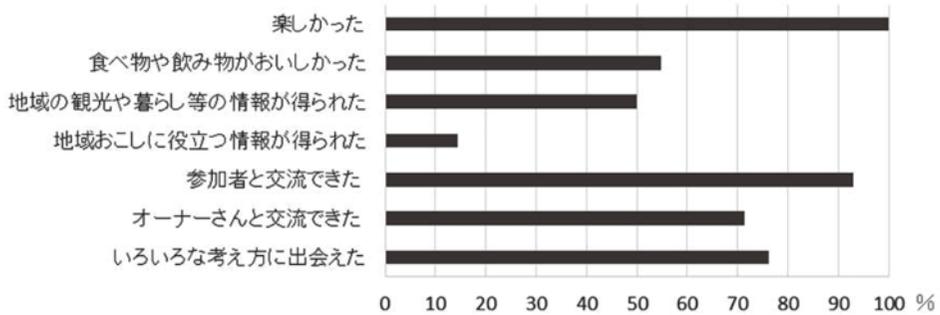


図13 「ひだマンデー」に参加してよかったこと

域の魅力への気づき、旅人や地元の人との情報交換の魅力などに分けることができ、具体的記述は以下のとおりである。なお、文面は簡略化しているものもある。

①多様な価値観との出会い：「色々な人生の生き方があるのだと感じた」「幅広い価値観の人がいるという気づき」「世界観が広がった」「都会で窮屈でルールに縛られた生活しか知らなかったが、飛騨の人や旅人との交流で「こんな考え方もあるのだ！」と思えた」

②仕事、生き方、暮らし方などについての考え方の変化：「休みの取り方、仕事への考え方、将来ビジョンなどについて様々な年齢、職業の方と話をし、自身の将来を考え、独立するきっかけになった」「働くことへのイメージが変わった」「暮らし方に変化？」「たくさんの方と出会い、様々な考え方、暮らし方、生き方を知ることで、もっとやりたいことをやっていいんだと思うようになった」「移住して自分のしたい仕事を楽しんでいる人々と出会い、今後転職することがあれば彼らの働き方を参考にしたいと思った」

③人とのつながり、地域の人とのつながり：「人のご縁がとても大切だということが再確認できた」「人とふれあう生活を考えるようになった」「何かしら交流の場に足を運ぶのもいいかなと思うようになった」「高山という小さな地域だからこそ人との繋がり・助け合いの大切さを実感」「地域の方との交流がより密になった」「ここにいれば、宿泊者のみならず、飛騨に住んでいる人とも知り合いや友達になれるんだと嬉しく思った」

④高山や飛騨地域の魅力：「地域の人と触れ合う中で、高山での生活の楽しみ方を知ることができた」「飛騨の魅力を改めて知ることが出来た」「その季節にあった食材と料理の体験もでき地域の文化を知るきっかけになった」「憧れの地で生活してみたいという思いから、思い切って移住することになった」

⑤旅人や地元の人との情報交換：「旅人と地元の人が合流でき、情報交換が出来る場はとても素晴らしい」「人の温かさ、旅の魅力を改めて教わった」「情報網・行動範囲が広がった」「海外ゲストさんとの触れ合いで英語の楽しさを知った」「海外ゲストとの会話で海外の文化を知れた」

日ごろから関心のある暮らし方や生き方について複数回答で尋ねたところ、図14に示すように、「ひだマンデー」のプログラムのねらいを反映して、「地産地消」(65.9%)、「地域おこし」(56.1%)、「ローカリズム」(48.8%)、「地域自給」(46.3%)など、地域重視、地域振興への関心を持つ人が多い結果であった。また、「スローライフ」(68.3%)、「モノ

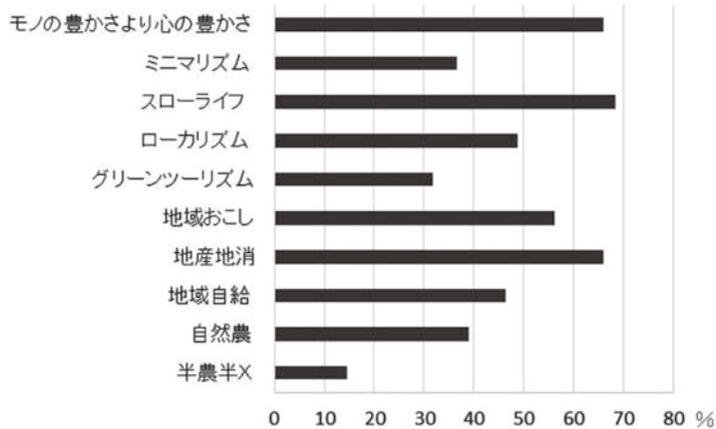


図14 日ごろから関心のある暮らし方や生き方（ひだマンデー）

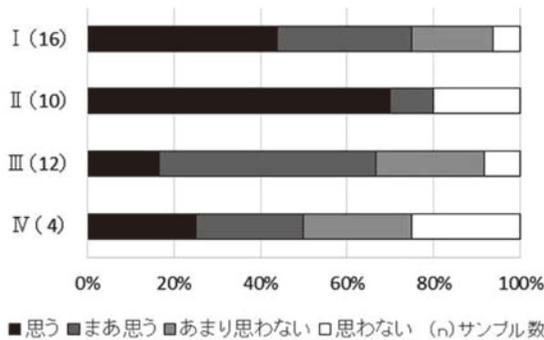


図15 暮らし方等関心度別の価値観変化（ひだマンデー）

の豊かさより心の豊かさ」(65.9%) などへの関心も高かった。

また、先に述べた「暮らし方等への関心度」では、Ⅰ段階が16人と最も多く、Ⅱ段階が10人、Ⅲ段階が12人、Ⅳ段階が4人となり、これらの暮らし方等に関心の高い人が多い結果であった。この関心度別に価値観変化の有無をみると、図15に示すように、Ⅰ段階では43.8%、Ⅱ段階では、70.0%が「思う」と回答しており、変化した人が多いことがわかる。また、Ⅲ段階でも、「思う」「まあ思う」を合わせて、何らかの変化があった人が66.7%、Ⅳ段階でも同じく50.0%あり、「ひだマンデー」への参加が価値観の変化を促している様子がうかがえた。

3.5 4つの事例の考察

① イベント等への参加理由

イベント等への参加理由では、イベント内容（自然農、自転車による世界旅、自然に関わる生産者による出展、飛騨地域の情報など）に関心があるからという理由が多いことは

もちろんであるが、加えて、参加者や講演者、宿オーナーとの交流がしたいからという交流面も理由の一つであった（市場であるMADOマルシェを除いて）。

②参加後の評価とその理由

参加後の評価は全般に高かった。その理由としては、いずれのプログラムでも「楽しかった」との回答が最も多く、イベント等として成功している様子がうかがえた。また、イベント等の内容についての関心の高まり（自然農や米作りへの関心、自転車旅やエコロジーへの関心、地域情報等の収集）に加えて、参加者等との交流ができたことなども、高い評価を生む理由であった。ゲストハウスでは、宿泊時に様々な交流が生まれることが大きな特徴であるが、イベント等においても、自己紹介を行うことによって会話を促すとか、イベント等の後に食事会などの懇親会を行うというように、参加者が交流しやすいような工夫がなされており、これによって、関心を同じくする人同士が会話を交わすなどして、イベント等への理解が一層深まったのではないかと考察できる。

③暮らし方等の価値観の変化

イベント等参加後、価値観に何らかの変化があった人は、「自然農田んぼ2016」では8割、「世界130か国自転車旅」では全員、「ひだマンデー」では7割と高く、これらのイベント等が、暮らし方等の価値観の変化に寄与していることがとらえられた。価値観変化に関する自由記述では、「自然農田んぼ2016」：食べ物への感謝の気持ちが増した、農業の楽しさや手作業による米作りが可であることに気づいた、自然の素晴らしさを再認識した、自然への感謝の気持ちが増した、「世界130か国自転車旅」：エコな暮らしの意義を感じた、エコな暮らしを実践しようと思った、「ひだマンデー」：多様な考え方や生き方と出会えた、仕事・生き方・暮らし方についての考え方が変わった、人とのつながりの大切さを再認識した、高山や飛騨地域の魅力を知れた、などのように、自然に関わる暮らしの大切さや魅力、人とのつながりや地域の魅力などへの気づきあるいは再認識に関する記述が多いことが特徴であった。

なお、「MADOマルシェ」では、何らかの変化があった人は6割弱にとどまり、自由記述も、「自然農に取り組みたい」「関心がありつつ実行出来ていないが、イベントを見て自分の意識を再確認している」の2件のみであったが、これは、市場という性質上、じっくりと取り組む他のプログラムに比べると価値観変化は生まれにくいと考えると考えられる。しかし逆に、マルシェでありながら6割弱の人に影響を与えたと考えることもできるのではないだろうか。

④日ごろから関心のある暮らし方や生き方

参加者が日頃から関心を持っている暮らし方や生き方については、いずれのプログラムにおいても、「地域おこし」「地産地消」が相対的に多く、「地域自給」「ローカリズム」なども含め、地域重視、地域振興への関心が高いことがわかった。また、「モノの豊かさより心の豊かさ」「スローライフ」への関心も高い結果であった。

⑤「暮らし方等への関心度」別にみた価値観の変化

「暮らし方等への関心度」別に価値観変化の有無をみたところ、Ⅰ段階やⅡ段階の関心度の高い人では、変化があったと「思う」が多い結果であったが、Ⅲ段階やⅣ段階の人でも、「思う」「まあ思う」を合わせた何らかの変化があった人が半数以上であったことから、イベント等への参加が、価値観を促している様子がうかがえた。

4. まとめ

「暮らし方」からみたゲストハウスの特質について考察することをねらいとして、暮らし方に関するイベント等の4つの事例をとりあげ、参加者の意識や価値観の変化をとらえたところ、以下の結果を得た。

①参加理由としては、イベント内容への関心に加えて、参加者等との交流面も多く（市場であるMADOマルシェを除いて）、参加後には、4つの事例ともに、イベント内容への関心が高まり、参加者等と交流できたことも評価されていた。ゲストハウスは、宿泊時に交流が生まれることが大きな特徴であるが、イベント等においても、参加者が交流しやすいような工夫がなされており、関心を同じくする人同士が会話を交わすなどしてイベント等への理解が一層深まったのではないかと考察できる。

②イベント等参加後、価値観に何らかの変化があった人が多く、その内容では、自然に関わる暮らしの大切さや魅力、人とのつながりや地域の魅力などへの気づきあるいは再認識に関するものが多いことが特徴であった。参加者は、日頃から、「地域おこし」「地産地消」「モノの豊かさより心の豊かさ」「スローライフ」などへの関心を持つ人が多かったが、「暮らし方等への関心度」別の価値観変化では、関心度の高い人はもとより、関心度の低い人でも半数以上に何らかの変化があったことから、イベント等への参加が、価値観の変化を促している様子がうかがえた。

③今回の4つの事例に関しては、ゲストハウスが、イベント等をとおして、自然や地域にかかわる暮らし方への関心を高め、価値観の変化を促す存在でもあることが考察できた。

参考文献

- 松原小夜子 2016：都道府県別にみた宿泊型ゲストハウスの開業実態，椋山女学園大学研究論集 自然科学篇（47），95-107.
- 松原小夜子 2017a：古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容—一人々の交流状況に着目して，椋山女学園大学研究論集 自然科学篇（48），159-180.
- 松原小夜子 2017b：暮らし方に着目した古民家ゲストハウス宿泊者の意識と価値観，人間と生活環境24（2），47-59.
- 松原小夜子 2018：宿泊型ゲストハウスにおけるイベントおよび体験プログラムの実施状況，椋山女学園大学研究論集 自然科学篇（49），95-107.
- 松原小夜子 2019：宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび体験プログラムの実施状況，椋山女学園大学研究論集 自然科学篇（50），73-90.